

医学における倫理——心臓外科医の考察

フエリックス・ウンガー

本日、皆さまとともに、医学についての考え方を分かち合えることを、うれしく思います。

私どものアカデミーと東洋哲学研究所との、このような共同シンポジウムは初めてではありません。十年以上前から、さまざまな内容、特に宗教間対話についてシンポジウムを開催してまいりました。実に刺激的な語りでした。

本日の「医学と宗教」というテーマですが、大変に難しい、挑戦的なテーマです。私は医師として、長い間、宗教と倫理の問題に関わってきました。私のクリニックでは20年の間に4万人もの患者さんを手術してきま

した。私自身、5千人以上の患者を手術してきました。それでも私は、医学というものをまだまだ分かっていないという実感をもっています。しかし、いろいろな教訓を得てきたことは事実です。今日は、その教訓を皆さまと分かち合っていきたいと思います。ここには医師や看護師の方々もたくさん来ておられるそうで、私自身も医師ですので、とてもアットホームな気持ちになります。

人類の歴史上、健康は、最も関心をもたれてきたテーマです。だれもが、健康で長生きしたいと願うものでしょう。そして病気になった時には、早く回復して社

会復帰したいと考えます。東洋でも西洋でも、千年以上もの間、たちどころに健康と長寿をもたらす霊薬 (golden herb) を探し続けてきたのです。

医学は「文化の一部」「社会を反映」

私は昨日、創価大学を訪問し、現代の大学や医学が抱える問題、そこに関わる倫理の問題について対話をしました。創価大学には看護学部ができるそうですが（2013年開設予定）、私が申し上げたいのは、「医学・健康科学といっても、文化の全体に関わっている。医学も、社会の文化的な努力の一部である」ということです。

そういうことをふまえて、医学の本質、とりわけ医学の倫理の問題について話したいと思います。というのは、現代に何かが失われてしまっているからです。何が失われているのでしょうか。

医者に診てもらう時、人は、医者が必要なすべての技能をもち、また精神的な価値についても幅広い教育を受けていることを期待すると思います。医者は本来、

ただの技術者ではないわけです。

しかし、今日の社会では倫理が失われてしまったため、「医者から患者を守らなければならない」という場合すらあるのです。医者が教育を受けており、患者との自然な関係を保つことができれば、医者から患者を守る必要もないわけです。今日のように、医学から倫理が失われてしまっている場合だけ、そんなことが必要になるのです。

しかし、倫理が失われているのは医学に限ったことではありません。いたるところで起きていることです。たとえば、現在の金融危機も、経済における倫理の欠如による結果の典型です。私たちの社会では、非常に大切なものが失われてしまっているのです。

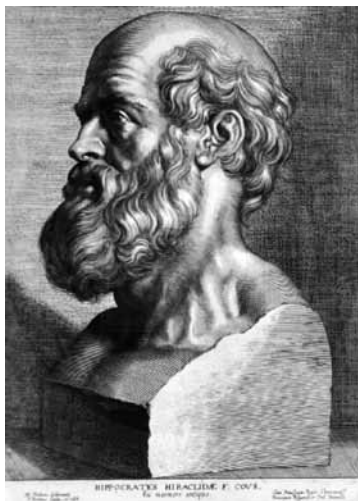
「健康」と「医学」とは、実は少し対照的な面があります。なぜでしょうか。「健康」というと、私たちは科学的なことを考えます。しかし、「医学」というものは、もっと深いものなのです。医学は文化的営為なのです。特に大切なことは「医者や看護師が、人間をどのように扱っているか」「どのように患者に関わっているのか」

ということですが。

もしも私たちが人間を搾取したり、自然を搾取するならば、(そういう文化のなかでは) 患者をも搾取するであらうことは明白です。私たちは、これとは別のアプローチをとらなければなりません。

「ヒポクラテスの誓い」を守るか

私は、古代ギリシャに生まれた典型的な西洋の伝統によって教育を受けてきました。そのなかで、今なお存在する規範の一つに、「ヒポクラテスの誓い」があり



ルーベンスによる彫像「ヒポクラテス」(1638年、アメリカ国立医学図書館蔵・提供)

ます。ヒポクラテス(紀元前5〜4世紀)

は——アポロ神の息子とされるアスクレーピオスという名医の子孫ともされていますが——自身が医学を教えていたコス島の神殿の神官でもありました。

彼は「ヒポクラテスの誓い」という宣誓を作りました。私も医学部を卒業した時、この宣誓を行いました。

【注・医師になる際、「自身の能力と判断に従って、患者にとって良いと思う療法をと



ギリシャ語とラテン語で書かれた「ヒポクラテスの誓い」。1595年、ドイツ・フランクフルトで出版された書から

り、有害と知る方法をとらない」「依頼されても死に導く薬を与えたり、中絶をしたりない」「男と女、自由人と奴隷の違いを考慮しない」「患者の秘密を守る」などの誓いを行う伝統が続いている」

医師としての誓いとは「痛みを鎮め」「病気を治し」「命を延ばす」ということです。これは簡単に聞こえるかもしれませんが、実際にはとても難しいことです。たとえば、終末期の患者の痛みを鎮めようとして、その人の命を何時間か短くしてしまうこともあります。反対に、延命しようとして、痛みを増してしまう場合もあります。病気を治すことと、延命すること、この二つにはバランスが必要なのです。

しかしながら、延命したほうが病院側は、もうかるわけですから、今日の近代的病院では、患者から最大の利益を得ようとして、わざと医師に延命治療をさせるという場合もあるわけです。こうしたことは絶対に避けなければなりません。これは、医学がいかに非人間的に変わってしまったかということを示す、ほんの一例にすぎません。

「自然・社会・精神」とのバランス

幾千年の昔、人類にとつての「最初の科学」は「神学」でした。つまり神への探究です。それを根源として医学が生まれ、哲学と自然科学——今や、大建築物となりました——が発展したのです。これらすべては関連し合つて成り立っているのです。

特に医学の自然科学的側面を見ると——事実、現代医学は自然科学から派生したのですが——その素晴らしい成果は明らかです。多くの病気を治せるようになりました。外科を例にとりましょう。私の専門である心臓外科の分野でも素晴らしい進歩があります。私が1968年に外科医を始めた頃は、心臓死に關してできることは、わずかでした。現在では多くの対処法があります。これは大きな進歩です。

しかし、わがアカデミーとしては、科学について、より広い視点をもっています。「自然 (nature)」「社会 (mankind)」「精神 (spiritual)」を三つの頂点とする三角形のなかで、今、自分たちがどこに立っているのかを知る必要があるのです。私たちは誰もが、自然、自然

科学、そして技術科学と関わりをもち、歴史、法学、経済、そしてもちろん医学、心理学などの面で社会との関わりをもっています。また精神的な面としては哲学、芸術、宗教などの関わりがあります。この全体の関わりの中に、人間という存在があります。

ですから、私は、「科学は人間に奉仕するという究極の目的にかなってはいじめて、生命に役立つ人間的行為となる」と常に申し上げているのです。

そして、健康とはバランスです。魂と身体と精神とのバランスなのです。たとえばヴァケーションに出かけた時は、素晴らしいバランスを取り戻すことができます。しかし何かの事故などに遭ってしまえば、もう何も考えられず、ただ怪我のことだけに注意が行ってしまいます。魂も同じです。心がズタズタになった時、他のすべてに影響します。これは、誰にも起こりうることです。深刻なのは、心の病気にかかった時です。ひどい鬱が、死に至らしめることもあるのです。私たちは生命内部でバランスをとります。そのうえで、環境や自然との関係でもバランスがとれていれば、私た

ちは、やる気にもなり、活動的にもなるわけです。

「人間機械論」を超えて

私たちは、ある医学のシンポジウムをやりましたが、そこで西洋医学が18世紀のラ・メトリー（1709～1751年）のパラダイムを基本にしているということに大変ショックを受けました。ラ・メトリーは（フランス生まれで）ベルリンに亡命した医師であり、哲学者でした。彼は「人間は機械である」と仮定していたのです。これは非常に単純な考え方で、たとえば肝臓の病気になれば、薬を投入するか新しい肝臓を代わりに入れるというように、非常に機械的、実際的なやり方です。

しかし今は21世紀です。医学の新しいパラダイムが必要です。

私は40年前に医学を勉強し始めましたが、すぐに気がついたことがあります。それは「患者」という存在が、医学の中できちんとした役割を担っていないという点でした。医学上の新しい発見だけが重要視されていたのです。そこには魂の側面は、あったとしても、

ほんのわずかでした。精神性は医学の考えには含まれていなかったのです。

必要なものは「献身」

今日求められている新しい医学のパラダイム——その精髓は何でしょうか。

84歳の高齢で、心臓の二重バイパス手術をした人がいます。心臓弁を交換してから数か月して、体力も素晴らしく回復しました。これがラ・メトリーのパラダイムの一つの側面、つまり「科学」の側面であり、確かに医学の分野で多くの役割を果たしたといえます。しかし、もう一つ非常に大切な側面が医学にはあります。それは「献身性」です。生命に対する献身であり、他者に対する献身です。これこそ医師の資質を決めるものです。たとえば、患者さんと対話している時は、CTをとるなどの技術的なものは必要がなく、大切なことは、その人とコミュニケーションを図ることなのです。患者さんは自分がどういう状況かを訴え、医師は耳を傾けて、薬を渡したり、必要な処方を行います。

患者さんの肩に手を当ててあげる。それだけで患者さんはとても安心し、信頼します。私は心臓手術のような激しい医療をしています。献身性が必要という面では同じです。たとえば患者さんのベッドまで行って、肩に手を置いて、「どうですか？ 気分はいかがですか？」と聞いてあげる。シンプルなことです。これが大切なのです。

「生命こそ至上の価値」

ここで価値の話をしたと思います。私は常に、「医学というのは、私たちがどのように人間に関わっているかを反映している」と言っています。医学は文化の一部なのです。

先日、モンテネグロで大きな会議に参加しました。「サイエンスとしての人文学」というテーマでした。もちろん、人間同士の相関の中から生まれた人文学が科学であることは明白なのですが、次の日のディスカッションで、価値についてナンセンスな議論がなされました。たとえば、学校で先生が子どもたちに「勇気

をもって行動しなさい」と教えれば、そこに価値が生まれるというようなことです。しかし、勇気をもって行動するというだけでは、価値とはいえません。それは、小さい善に通じるかもしれませんが、大いなる価値から生まれ出たものではないのです。

価値について考える時、私は池田SGI（創価学会インタナショナル）会長との対談を思い出します（対談集『人間主義の旗を——寛容・慈悲・対話』東洋哲学研究所刊）。

私たちは、「生命それ自体が至上の価値である」という点で合意したのです。これは、それ以上の議論を要しない明快なことであると思います。生命が最大の価値であるとわかれば、人を攻撃したり殺したりということは起きません。環境に対しても、きちんとした対応をするようになります、他者に対しても、正しい態度がとれるようになります。そこに「橋」を架けられるようになるのです。

そして次に、私たちがどのように行動すればいいのかという課題が生まれます。そこに「徳」というものが存在するのです。キリスト教では正義と知恵、そし

て愛、希望、信仰という徳があります。人間にとって、恐怖を克服できる唯一の可能性は、信仰をもつことにあるのです。

倫理の課題とは、人々を、学生を、すべての知識を、他者への支援のために参加させることであり、そのように彼らを導いていくことです。これらは簡単なことに聞こえるかもしれませんが。しかし実行するのは、とても難しいのです。われわれはみな凡人ですから。

価値観を喪失した「拝金社会」

何千年もの間、人間を成長させる役割を果たしてきたのは宗教です。ヨーロッパ世界を構築してきたのはキリスト教ですが、すべての宗教は生命に奉仕するものです。その他には何もありません。宗教は人々に、人生の新しい希望と意義を与えてきました。そうやって人々が人生を生き続けることができるようにしてきたのです。

ある人から「現代の世界に、病気の症状がありますか」と聞かれましたので、私は、金融危機について申

し上げました。なぜなら、そこに、世界が「人間がお金に奉仕する」という拝金主義になってしまった過ちが見えるからです。お金というのは、たんなる人工物であり、紙にすぎません。日々を生きゆく人間の「生命」

そのものとは直接の関係がないのに、今や金銭が主人となって人間生命が軽視されるようになっていきます。こうして、何千何万もの人たちが失業しています。もちろん、お金は必要です。率直に言って、私もポケットに数ドルはほしいです。しかし私は、お金のために生きているわけではありません。お金が私の人生の向上に役だたなければなりません。ここに大きな違いがあります。

誰しも最後は人生に終わりを告げます。これは逃れられないことです。そこに確固たる価値観がなければ、人間には救済がありません。思想の進歩ありません。この価値喪失は、現在の拝金社会の悲劇です。人間という存在を無神論的に扱ってしまったために起きた災難なのです。

「神聖なるもの」をもたない危険

医学は、私たちの社会の一部です。そして社会の中で、患者さんに直接関わり、その言葉を理解しなければならぬのは医師です。

今、医学の分野には重要な課題がいくつもあります。

「人工中絶」というテーマは、ヒポクラテスの時代から語られてきました。それでも中絶はたくさん行われ続けています。もちろん医療的な側面もあるのですが、胎児を殺すという事実は消えません。また「人工授精」という問題がありますが、これは深刻な問題とは思いません。たとえばカップルが子どもをほしいと思つた時に使ういい方法であり、治療的手段だと思つた

次に、自殺^{ほうじく}幫助という問題があります。特にオランダで多いのですが、患者が医者から薬をもらつて、その薬で亡くなるという事例が横行しています。ある意味で、患者さんが殺されるといふことなのです。これがオランダの死亡率の3パーセントに当たるそうです。私の考えでは、これは医者として最悪の行為だと思つた。医者というのは生命を守る立場にあるのです。

【注…オランダでは安楽死法（要請による生命終結及び自殺補助〈審査手続〉法）が2002年4月から施行されている】
無神論的な社会には、神聖な存在がありません。そこから容易に、こういうアプローチをするようになる傾向があると思います。そういう風潮の中から、たとえば、「75歳以上の人はもう役に立たない」「もう逝かなければならない」という考え方が出てきます。これは非常に危険です。私たちの社会は高齢化してきています。このアプローチをとって、高齢で役に立たないから死んでもいいということになってしまうと、これは大変なことです。しかし、これは現実起こっていることなのです。

別な側面を見えますと、「延命のために集中治療をする」場合があります。これは医者、看護師、親族、誰にとっても、つらい状況です。ある朝、私はICU（集中治療室）にいました。心筋梗塞の63歳の女性の外科手術をしなければならなかったのです。彼女は、以前に手術した梗塞がまた大きくなって破裂していたため、二回目の手術をするようになっていました。ほとんど

危篤状態でした。私はデータを見て、すべての治療をやめることが最良の方法だと思いました。さて、何が起こったと思いますか？ 治療をすべてやめてみると彼女は冬眠のような状態になりました。そして薬も使わずに3週間も生き続けたのです。親族や周囲の人たちは、びっくりしていました。医学というものが、いかに難しいかということです。

他に「脳死」問題がありますが、私は難問とは考えていません。「脳死（brain death）」というのは、あまり良くない言葉です。私はバチカンのアカデミーで話したのですが、「過度の昏睡状態」という現在の脳死の定義が正しいと思います。この定義は、人間を尊重していると思います。脳死という言葉を使うと、ただちに患者を「物体」として、おとしめてしまうのです。昏睡状態という言葉では、患者に、死につつある「人間」としての主体性を認めています。ここには大きな違いがあります。

【注…ウンガー会長は前掲の対談集『人間主義の旗を』の中で、次のように述べている。

「私は、『脳死』という言葉を使うことには、ためらいがあります。なぜなら、『脳死』という言葉によって、人々は、その時点で、その人が『死んだ』と解釈してしまうからです。今までなら集中治療を施していたものも、この段階で止めてしまうことになります。私は、脳死といわず、フランスの神経科の教授が、いみじくも定義した『過度の昏睡状態 (coma dépassé)』という言葉のほうがよいと思います。つまり、脳が秩序をなくして、体温が落ち、心臓はまだ動くことができたとしても、循環機能が落ちて、爪が青黒くなっていく状態……。ところが、それが、いつの間にか、英語で『脳死 (ブレイン・デス)』と表現され、定着してしまったのです」(289頁)

医学を企業利益に従属させるな

私は個人的には、新しい技術を使うことに抵抗はありません。私はヨーロッパで最初に人工心臓を移植した医者です。新しい技術に対する恐怖はありません。もちろん、緻密な準備をし、きちんと記録し、時には動物実験もしなければなりません。データを記

録すれば、何が実行可能なものの指標が見えてくるでしょう。私は、そう期待しています。いずれにせよ、新しい技術には常に入念な準備が必要です。そして私が驚いたのは、人工心臓の埋め込みというものが、思ったほど難しくはなかったということです。

しかしながら、私は、企業が金もうけのために、新しい技術を使うよう人々をけしかけることには反対です。彼らは時に、新聞を使って「この新しい技術が、あなたの生命を救うことでしょう。ぜひ医師に使用を依頼してみてください」等と宣伝するでしょう。こうやって産業界が莫大な利益を得るなどということは最悪だと思います。

一つの例を紹介します。私が医学生時代の、血糖値の正常値は、だいたい120だと言われていました。しかし今では正常値は100だと言われています。昔はコレステロール値が250から270が正常だと言われていましたが、その後220、180と下がっていき、現在では220から230が正常だと言われています。こうした変化には、業界の利害が大きく関わ

っています。たとえば、「コレステロール値が180以上になったら、このスタチン（血液中のコレステロール値を下げる薬物）を」と宣伝して売るのであり、つまりは会社の株主の利益のためなのです。

「人間的な医師」とは

それでは人間的な医師とは何なのでしょう。私たちに必要なのは医師であって、技術屋ではありません。医師には、胸中に人間への関心と精神性がなければなりません。社会を配慮しなければなりません。

こよなく重要なことは、患者に尽くし、患者のために行動することです。行動する勇気が必要です。口で言うほど簡単なことはありません。たとえば、誰かが倒れていたら、すぐに心臓マッサージあるいは人工呼吸をするなど、行動しなければなりません。ただ横に突っ立って、この人はどういう状態なんだろうなどと考えているだけでは、だめなのです。「ただちに行動する勇気」が必要なのです。これをもっているのが本物の医師だと思います。医学者としての教育を受け、

大地にしっかりと二本の足で立ち、人間を超えた存在への畏敬を少しでももっている医師ということです。

医師としての倫理という話は、ややこしいことのように聞こえますが、結論は簡明です。

「シンプルに考えよ。勇気をもって、あなたの医学知識を患者さんを助けるために使え」——この一点に尽きるのです。

(Felix Unger / ヨーロッパ科学芸術アカデミー会長)